

## 『編み物を贈ろう募金』 2016 年 活動報告

### 【世界の子どもたちに編み物作品を贈ろう 2016】 アフガニスタンの子どもたちへの支援

5,731 点の愛のこもった手編み衣料をアフガニスタンの子どもと保護者 2,257 人に届けることができました

ワールド・ビジョン・ジャパンが協力団体として参加する「世界の子どもたちへ編み物作品を贈ろう」プロジェクト（共催：MS&AD インシュアランス グループ ホールディングス株式会社 MS&AD ゆにぞんスマイルクラブ、公益財団法人日本手芸普及協会）。世界で支援を必要としている子どもたちに、「あなたたちを忘れていません」というメッセージを届けることを目的に、日本のボランティアの皆さまにセーターなどの衣類を編んでいただき、編んでくださった方のネームタグをつけて贈る取り組みです。

2016 年は、アフガニスタンを支援先としてプロジェクトを実施。アフガニスタン西部のヘラート州ヘラート市でワールド・ビジョン・アフガニスタンが運営するストリート・チルドレン・センターを利用する子どもたちとその保護者の一部、計 2,257 人に、セーター 1,427 着を含む手編み衣料 5,731 点を届けました。



アフガニスタンヘラートでの贈呈式で

ボランティアの皆さまにお寄せいただいた手編み衣料は、2016 年 10 月末に日本を出発し、空路にてアフガニスタンのカブールに到着。税関手続き後、陸路でヘラートに送られ、厳冬期の始まる 12 月上旬に、ご寄贈いただいた全ての手編み衣料を良好な状態で、ストリート・チルドレン・センターに届けることができました。衣料はセーター、マフラー、帽子などをサイズごとにセットして袋に詰められ、4 回に分けて子どもたちに贈呈されました。



手編み衣料を身に着け、喜ぶ子どもたち

日本の皆さまの心のこもった手編み衣料を受け取った子どもたちの様子をお伝えします

### ～ストーリー～ 『母親の抱擁のように暖かく』～

車のクラクション、道を歩く人々の話し声、商人が子どもたちに菓子を売る声、学校のベルの音。しかしこの少年の耳にはその雑踏の音は入ってきません。その小さい手でゴミをあさり、中からプラスチック、鉄、紙などお金に変えられるもの、または乾ききったパンや食べ残しの料理あるいは果物のかけらなど、食べられるものを探すのに夢中だからです。

少年は白いガラスの容器を見つけました。中には 3 滴ほどのフルーツジュースが残っています。容器をのぞきこみ、集中して、底に残ったジュースを口に運びます。残された数滴がガラスの容器をつたって舌に届くまで待っています。その数滴が口に入ったとき、まるでその日、いやその週、その月で一番おいしいものを口にしたように、

じっくりと味わいます。しかし、雑踏の人々の中に、に少年の小さな幸せに気づく者はいません。

気温はマイナス 9℃です。少年の吐く息は白く、唇はひび割れ、指先は青白くなっていますが、寒さを気にしている余裕はありません。家族が生き延びるために必要なものを探すことに必死だからです。

アフガニスタンでは驚くべき数の少年少女たちが、日の出から日没まで、街頭で物乞いをしたり、靴磨きで稼いだり、ゴミをあさる生活をしています。ヘラートでは少なくとも 5,000 人の子どもたちが、生活のために外で働くことを余儀なくされています。この子たちは学校ではなく、路上で育つのです。

この 3 か月のあいだ、13 歳になるミルワイス君は朝 7時から夜 7時まで、小さな荷車にトマトを積んで売っています。以前はゴミをあさって、1 日あたり 70 アフガニ(約 140 円)ほどを稼いでいました。

ミルワイス君は言います。「ゴミをあさっていたときに、仕事をしないかって声をかけられたんだ。いいよ、って答えたら、トマトを売る荷車をまかされてね。1 日 50 アフガニ(約 100)くらいの稼ぎだけど、街中を歩いてゴミをあさる生活よりはマシだよ。」

ミルワイス君は家族で一番年長の子どもです。父親は荷物運びの仕事に就いていますが、年をとってから体調がよくなり、休みがちです。母親は以前ピスタチオを売っていましたが、ミルワイス君の妹が病気になって以来、仕事をしていません。

### ワールド・ビジョン・アフガニスタン(WVA)の活動

ワールド・ビジョン・アフガニスタン(WVA)はストリート・チルドレン・センター(SCC)を設立し、ミルワイス君のような子どもたちに手をさしのべる活動を行ってきました。ミルワイス君はこの 2 年間、SCC にほぼ毎日通い、心理ケア、教育、保健などの支援を受けました。

SCC では、ミルワイス君が公立の学校に入学できるように支援したほか、同センターに通うほかの子どもたちが通学できるよう、必要な教材を提供してきました。アフガニスタンでは、子どもたちのうち、学習に必要な教材や文具を準備できる家庭に住む子どもは 2%程度に留まります。

「前は学校に行かなかったけれど、センターに来るようになってから公立学校に通ってるよ。」ミルワイス君は言います。冬は一日中働いていますが、新学期にはそれも変わります。「学校を休むのはいやだってボスに伝えたら、授業がある時期にはパートタイムで仕事をすることを認めてくれたんだ。」

ミルワイス君とお父さんが日雇いの仕事で稼いだ賃金は、家族の食料でほぼ消えてしまいます。わずかな収入では、暖かい防寒具を買うのは難しいことなのです。ミルワイス君は、学校で、クラスメートにずたずたの服装を



ストリート・チルドレン・センターで過ごす子どもたち

指さされ、新しい服を買うことができないことをからかわれたと話します。「ほかの生徒のいる前でストリート・チャイルドって呼ばれたんだ。恥ずかしかったけど、本当のことだから、言い返せなかった。」

2015年の世界銀行の推計によると、アフガニスタンでは、人口の3割にあたる人々が食料、衣服、衛生、教育、保健の面において最低限の必要を満たすことができないレベルの生活を送っています。

アフガニスタン国家災害管理省(ANDMA)の最新の調査によると2016年の冬、厳しい天候によって影響を受ける世帯の数は、西アフガニスタンのヘラート地方において50%増加しています。

しかし、この冬、日本から1,427着の手編みのセーター、27着のベスト、2,257個の帽子など手編みセーターが、もっとも支援を必要としている子どもたちに届けられました。

センターで働くワールド・ビジョンのカウンセラーのポヤ氏は「ストリート・チルドレンの家庭では、防寒具を子どもたちに与えられないのです。稼ぎはすべて食べ物に使われてしまいますから。ここにいる子どもたちにとって、新しい服を着るのは初めての経験なのです。裕福な家庭の子だけが身に着けているような衣類を、彼らも着ることができたのです。」と説明します。

送られてきた暖かい服や小物のことを知って、センターに通いたいと希望する子どもの数も増加していると、ポヤ氏は報告します。

日本からの愛の贈り物は、ミルワイス君の手にも届けられました。

ミルワイス君は、表情に驚きをいっぱい浮かべてセーター、帽子、そしてマフラーを受け取りました。「あったかいよ。外に出るときはこれを着けるんだ。新しい服を着たのは初めてだよ！」

ごく一般的ななものだと思われるものでも、ストリート・チルドレンにとっては初めての経験です。ミルワイス君はマフラーを贈られたとき、使い方がわかりませんでした。

でも恥ずかしいとは思わなかったのです、だってセンターに来ているほかの子たちもわからなかったのですから！使い方を教えてもらったからは、誇らしげにマフラーを身に着け、披露しています。

ミルワイス君は、暖かい衣類を編んでくれた日本の方々にとっても感謝しています。「暖かいし、この服大好きって伝えてください！僕のお母さんもこういう暖かい服を編んでくれたらって思う。もう冬なんて怖くないよ」。

12歳になるサベラちゃんも、センターで手編みの服を贈られた子ども一人です。

7人兄弟の末っ子で、お母さんが家でウール紡ぎをするのを手伝っています。お父さんは日雇い労働者で、収入がない日もあります。兄弟全員が路上で働き、家計を支えています。

興奮気味のサベラちゃんはうつむきながら、ポツリポツリと話します。「家族全員の着るものは余裕のあるご近所から、不要になった服をもらっているの。」



サベラちゃんは、顔をあげて続けます。「日本の方から贈り物をもらったから、もうそういうことをしなくてもいいわ！日本の人にありがとうって伝えてください。それから私、勉強を頑張るって。学校の先生になって、私たちみたいに貧しい人たちを助けるの。」

～ワールド・ビジョン・アフガニスタンとストリート・チルドレン・センターのスタッフから～

「ヘラートに住む支援を必要とする子どもたちへ素晴らしい贈りものを送ってくださった日本の皆さまに深い感謝を申し上げます。この子たちにとっても、またこの子たちの親にとっても、厳しい冬を耐えることができる暖かい服をお送りくださったことは、非常にありがたいことです。

皆さまのご支援は、子どもたちにとって本当に大きな意味を持つ大きな贈り物です。子どもたちの心に希望をもたらすご支援は、アフガニスタンに明るい未来をもたらしてくださいませ。

日本の皆さまのあたたかいご支援に、心から感謝いたします。」